

月刊

2016

11
月号

みんぱく



特集

交流の場としての

アイヌ文化展示

伝統に基づくあらたな文化の創造 齋藤玲子・精神文化／儀礼を展示すること 北原次郎太

民族学博物館とアート作品 山崎幸治・「伝統」と「現代」のあいだで 瀧口夕美

伝統家屋「チセ」の再生 齋藤玲子・アイヌと海外の先住民 岸上伸啓・国立アイヌ民族博物館の設立 佐々木史郎

キャラクターが走り出す

野田サトル

プロフィール
北海道生まれ。漫画家。
2003年、読切「葦子さんの凶という今日」(講談社)でデビュー。明治末期の北海道を舞台とした冒険活劇「ゴールデンカムイ」を『週刊ヤングジャンプ』(集英社)に連載中。
2016年マンガ大賞を受賞。
主な作品に第54回ちばてつや賞ヤング部門大賞を受賞した「ゴリーは前しか向かない」(講談社)や「スビナマラダ」(集英社)など。



月刊
みんなぱく

11月号目次

1 エッセイ 千字文
キャラクターが走り出す
野田 サトル

特集 交流の場としてのアイヌ文化展示

- 2 伝統に基づくあらたな文化の創造
齋藤 玲子
- 4 精神文化／儀礼を展示すること
北原 次郎太
- 5 民族学博物館とアート作品
山崎 幸治
- 6 「伝統」と「現代」のあいだで
瀧口 夕美
- 7 伝統家屋「チセ」の再生
齋藤 玲子
- 8 アイヌと海外の先住民
岸上 伸啓
- 9 国立アイヌ民族博物館の設立
佐々木 史郎

- 10 OOLしてみました世界のフィールド
ドイツのポップカルチャー市場調査——1日目
山中 由里子
- 12 みんなぱく Information
- 14 味の根っこ
ヤギのボードク
辛嶋 博善
- 16 文化遺産おもてうら
「よそ者」が継承する文化遺産
——モロッコ・マラケシュのリアド
安田 慎
- 18 手芸考
次なる「手芸」へ
ひろいのぶこ
- 20 ながなんちゃ
土地に名を刻む
内田 吉哉
- 21 次号予告・編集後記

特集 交流の場としてのアイヌ文化展示

民博開館三〇周年の際にまとめた「展示基本構想二〇〇七」には、民族学博物館をとりまく状況の変化に則して、双方向・多方向的な交流の場として博物館の再編がもたらされるとある。新しくなったアイヌの文化展示でも、研究者をはじめとする展示の作り手、展示対象の文化に属する人びと、そして来館者の相互の交流と啓発の場をめざした。



「誇りを伝える」のサブセクション。手前の丸いテーブルにはハンズオンの資料を置いている

伝統に基づく あらたな文化の創造

齋藤 玲子

民博 民族文化研究部

時代の変化と展示の方向性

二〇〇八年から始まった本館展示のリニューアルは、「中央・北アジア」と「アイヌの文化」展示場で完結した。両展示場は、開館から二年後の一九七九年に公開されたので、三七年ぶりの大規模な改修ということになる。この間、アイヌ民族とその文化をめぐる状況にはさまざまな変化があった。

とくに大きなできごとは、一九九七年に「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」（通称：アイヌ文化振興法）が制定され、一八九九年公布の「北海道旧土人保護法」が廃止されたこと。そして、二〇〇八年に国会で「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」が採択され、国による総合的なアイヌ政策の推進が始まったことだろう。それまで日本政府は、公式にはアイヌを先住民族と認めてこなかった。みんぱくが開館したころは、アイヌが日本のマジョリティとは異なる独自の文化をもつ民族だと示すことが、まず必要だった。そのため、旧展示では「伝統的な」衣・食・住・生業、儀礼、そして工芸の巧みさをあらわす資料を展示することに重点が置かれた。



クマ送り儀礼の祭壇（復元）と折りを捧げる人（マネキン）

の展示の優れた手法や資料を活かしつつ、現代における多様なアイヌ文化のありかたを、アート作品や映像などで紹介することにした。

「人」を感じられる展示に

検討会で複数のメンバーから出た意見に、「人の気配が感じられない」「整然としすぎて」「色が少ない」「音が無い」「同時代性をあらわしたい」などがあった。これらを改善するために、実体として復元家屋「チセ」のなかとそのとなりの祭壇の前にマネキンを置いた。導入部では「同時代を生きる」というサブセクションで、現代の作家による「人」をモデル・イメージした木彫作品を展示した。この三点の作品をはじめ、複製・復元資料以外で作者があきらかかなものは、できるだけキャプションに作者の氏名を明記し、新展示のために収集したものを中心に作者のプロフィールもせた。

また、多くの方々に文化継承の取り組み等の写真を提供いただき、パネルとモニターで紹介した。みんぱくで毎年おこなわれているカムイノミの写真もパネルにした。二台のモニターでは動画も使い、芸能・音楽のコーナーでは歌や楽器演奏を聴ける装置も設けた。

交流の場をめざして

しかし、課題も残っている。検討会議でも完成後の検証でも、民具などが使われる場面や使用方の解説不足という指摘があり、「楽しみ」や「体験」も少ないという意見が出たが、十分に伝えること

新展示に本格的に着手したのは二〇一三年度からである。館内の教職員に加え、アイヌ民族の関連団体・組織等の職員や研究者といったアイヌ文化を担い・支える立場の方々に、展示を検討する会議に入っていた。本特集に寄稿いただいた北原、山崎、瀧口の三氏のほか、貝澤和明氏（公益社団法人北海道アイヌ協会）、津田命子氏（北海道立アイヌ総合センター）、アイヌ服飾文様研究家、床州生氏（阿寒アイヌ工芸協同組合・木彫家）、野本正博氏（一般財団法人アイヌ民族博物館）（五十音順）である。会議では、「伝統に基づくあらたな文化の創造」を基本コンセプトとして、これまで



新展示の公開日におこなわれたカムイノミ。新しい展示ができたことの感謝と展示の普及・継承の願い、そして物の神（資料自体）に祈っていた

ができている。普及用の小冊子やリーフレットなどを座って読むための机と椅子を設置し、ハンズオン（触れる展示）資料も置いたものの、数は少ない。解説については電子ガイドで補いつつ、ホームページで公開するデータベースを充実させるなど、別のプロジェクトとも連携しながら改善していきたい。

また、二〇一二月に開催予定の新展示PR事業「アイヌ展示チアシリカラ！（アイヌの展示をリニューアルしました）——冬のフォーラム二〇一七」では、民話を原作とした人形劇の上演や音楽ライブをはじめ、展示作品の作家による実演やギャラリートークなど、楽しみながらアイヌ文化にふれられるイベントを計画している。アイヌ語研究者を招いてのゼミナールや本館「アイヌの文化」展示チーム教員らによるウィークエンドサロンも予定している。そうした機会に参加される方々からご意見・ご感想をいただけることを期待している。

精神文化／儀礼を 展示すること

北原 次郎太

北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授

みんぱく開館当初のアイヌ文化展示が作られて以来今日まで、アイヌの文化的状況や研究の動向にも大小の変化が起こっている。展示リニューアルにあたっては、以前の展示の優れた点を踏襲しつつ、この間の変化を反映したものと異なるよう留意した。

イナウに見る地域性

樹木を削って作り儀礼の際の奉納物となるイナウは、地域により形状や用い方が多様であり、みんぱくでは当初からこの点を意識した収集・展示がされてきた。リニューアルに当たっては展示物を刷新しつつも、この方向性を踏襲することとした。とりわけ千島のイナウは希少であることから、今回も同地方の別資料を展示した。また、道東地方のイナウで、明治期以前に属する資料は少ない。あらたに展示した芽室地方の男女のイナウは、収集が明治後半と古く、イナウが性別をもつ擬人的な祭具であることを示すことにも適した資料である。

儀礼展示の難しさ

以前の展示では、祭壇と復元家屋を別個に設置

し、それらの位置関係もふくめた暮らしの様子は、大型のジオラマで示していたが、無人の復元家屋については「さびしい」という声もあった。リニューアルに際してはジオラマを撤去し、家屋と祭壇を実際の位置関係に即して配置したうえで、それぞれにマネキンを配置することで、人の暮らし・息づかいが感じられる展示となるよう心がけた。

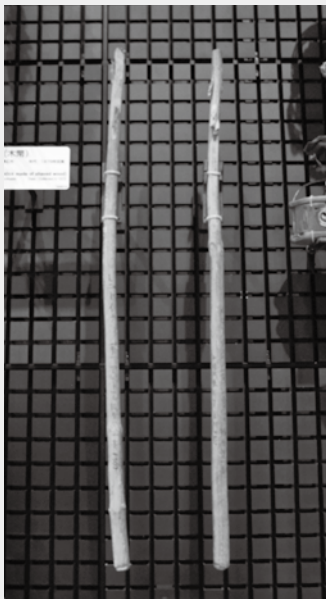
祭壇の前には祈りをあげる男性のマネキンを置き、祈りの所作や祭具の用い方を示した。それに合わせて、屋内でも儀礼の様子を見せることとし、女性がお神酒を注ぐ場面を再現した。

儀礼を展示するうえで難点のひとつは、それに関する情報が乏しいことである。儀礼の所作は、誰がどのようにそれをおこなうかが、地域や家系によって多様である。いっぽう、それに関する情報はごく限られている。これらの家屋と祭壇は、沙流郡平取町二風谷の萱野茂氏を中心製作者されたものであることから、マネキンの仕草も同地方のものを再現することとし、萱野氏の著作中の写真を元にポーズを決めた。

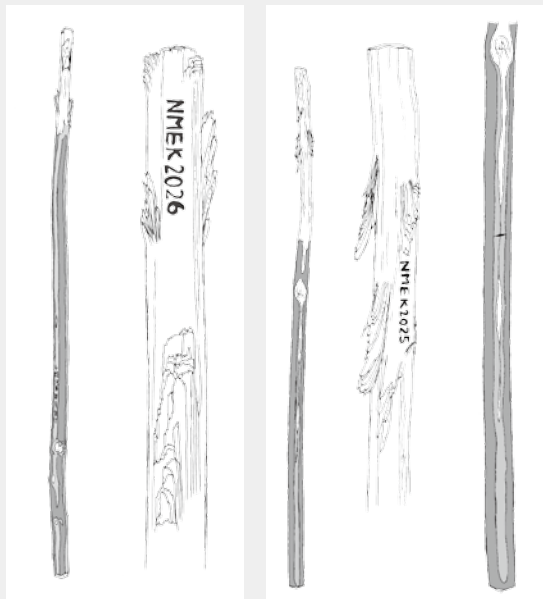
呪術と他界観

新展示には、あらたに他界観、シャマニズムと呪術に関する要素を加えることとし、死者用の装束や墓標の複製、病気治

療具、近年収集されたシャマンの太鼓と木製守護神像などを展示した。展示の構築作業は、研究上の課題を再認識する機会でもある。リニューアルによって浮き彫りとなった課題や来館者の反応も検討しつつ、調査・収集を進めたい。



あらたに展示した芽室地方の男女のイナウ
左(男性)：K0002026、右(女性)：K0002025



右写真、芽室地方のイナウの詳細図
画・北原次郎太

民族学博物館と アート作品

山崎 幸治

北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授

文化展示のなかでのアート作品

現在、世界各地の民族学博物館での先住民に関する展示において、アート作品は欠かせない存在となっている。今回のアイヌ文化展示のリニューアルも例外ではなく、伝統工芸品に加えて、いわゆるアート作品も複数点展示されている。なぜアート作品が展示物として選ばれるのであろうか。

その理由としては、複数の要因が考えられる。そのすべてを列挙することはできないが、まず、博物館と美術館との関係性についての議論の深化により、展示のスタイルが変化してきたことが挙げられる。ここではモノを、当該の民族文化を理解するための資料としてのみとらえるのではなく、個人の作品としてとらえようとする。展示物に付されるキャプションに「民族集団名」だけではなく「作家名(個人名)」がしるされるようになってきたことは、このことを象徴的にあらわしている。次に、工業製品の普及により物質文化が世界的に均一化してきている現代において、モノだけによる民族文化の紹介が困難となり、同時に、アイデンティティといった人間の内面や、現代に生きる



展示場入り口で来館者を迎えるサブセクション「同時代を生きる」の3つの木彫作品

先住民からのメッセージを展示に盛り込むことが求められるようになってきたことも要因として挙げることができるだろう。そして、そのようなメッセージ性を「作品」という名のモノに込める人びとがアーティストとよばれる人びとであり、博物館は、彼らのアート作品をとおして、人びとの内面や先住民からのメッセージを展示しようと試みる。アーティストにとっても、自らの作品が博物館に展示されることが、何らかのメリットとなる

ことが多いことも見逃すことはできない。その意味で、先住民の展示にアート作品が展示されること自体、博物館と先住民との交渉の現時点での結果といえる。

時代を映し、生まれ続けるアート作品を

とはいえ、これまでの民族学博物館でのアート作品の展示では、各民族の伝統的なデザインをアレンジしたものなど、観覧者がすでももっているイメージとの連続性がわかりやすいかたちで担保されているアート作品が選ばれ、展示されてきた傾向がある。筆者は、それらのアート作品の方向性を否定するものではない。なぜなら、伝統は永遠のテーマだと考えているからである。また、先住民自身が観覧者のもつイメージに近づき、それをズラしてみせること自体がアートとなっているからである。しかし、同時に、そこにある種の限界を感じ、あらたな刺激を待ちわびていることも事実である。

アートは、観る者へ訴える強い力と批評力を持ち、その時代を映す鏡である。今回リニューアルされたアイヌ文化展示のアート作品も、継続的に展示替えをおこない、また、次々と生まれてくるアート作品を収集・展示・保存していくことが、民族学博物館には求められているのではないだろうか。十数年後、現在からは予想もできないモノやコトが、アート作品としてアイヌ文化展示コーナーに展示されていることを期待している。

「伝統」と「現代」のあいだで

瀧口夕美

編集グループSURE



鍋沢元蔵「ユカル伝」1954年筆録

わたしは東京で、月に二度、アイヌ語をアイヌの子どもたちに教えている。ここでは、毎回、プリントを配る。アイヌ語をホワイトボードに書き、みんなでそれを読む。しかしそれらは、もともと、文字をつかわずに伝えられてきたことばだ。歌や踊り、おしゃべり、たくさん物語、祈りのことば、あいさつのことば、おまじない。人間だけでなく、カムイの声や、自然の音に満ちた環境での暮らしを、アイヌ語から感じる。わたしの授業は、それと比べると、どこか焦っているようであり、ことばに接する態度が、せせこましいようでもあって、もどかしい。

エカシの文字が伝えるもの

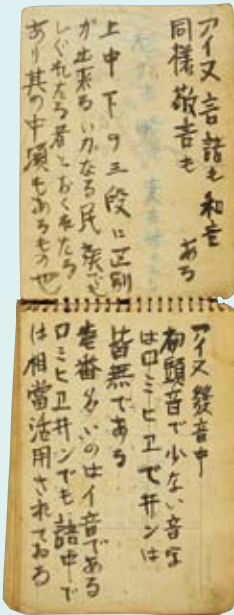
新しいアイヌ文化展示では、前半部に、チセがあり、伝統的な装飾品や衣類、宗教儀礼の道具、農具など、生活のなかで使われたものが展示されている。後半は、それらの伝統を受けつぐ人の手になる現代の工芸品や、先住民族の権利に関する歴史を伝える。

展示の前半と後半のちょうど中間あたりに、椅子とテーブルが置かれた。そこには、本やアイヌ語のテキスト、より詳細な資料にアクセスするためのガイドなどが置かれている。テーブル席のすぐ近くには、エカシ（祖父や高齢の男性を、敬意をこめてよぶ言い方）たちが書き残したアイヌ語の展示が

エカシの文字が伝えるもの



アイヌに関する資料が閲覧できるコーナー。左奥には「ユカル伝」や「アイヌ単語集」が展示されている「ことば」のコーナー



山本多助「アイヌ単語集 4号 ユヨリンまで」1943年

ある。時代が変わりつつあるなかで、どうやって自分たちのことばを残していくか。山本多助は「アイヌ単語集」のなかで「アイヌ発音中、初頭音で少ない音字はロミヒエでピンは皆無である」と断言する。鍋沢元蔵の「ユカル伝」をしるすカナ文字は、次々とあふれるようにページをうめつくす。二人のエカシに共通するのは、自分のもつことばを深く理解する思索であり、同時に、そこから一歩外に出て、別の言語の使い手の立場にたち、客観的にしるす力だと思ふ。

時代の流れのなかで

縦長の展示の順路を歴史の時間の流れとして見ると、中間のテーブルのある位置で、わたしたちアイヌはさまざまな変化を経験した。アイヌはその時代時代で日本やその周辺の文化を取り入れ、あらたな生活スタイルをつくりながら暮らししてきた。その大きな画期が、文字の使用だ。伝統から現代にぱつと切り替わったのではない。そのあいだには、人びとの多岐にわたる努力と葛藤がある。

近ごろでは、「もう伝統的な姿で暮らすアイヌはいないのだから、アイヌ民族はいない」という人もいる。しかし、このテーブル席から展示をながめ、資料に触れて、さまざまな観点からアイヌに起こったことを知って欲しい。

伝統家屋「チセ」の再生

齋藤 玲子

民博 民族文化研究所

チセを活かす

「アイヌの文化」展示場の中央にどっしりと構える復元家屋。アイヌ語でチセとよばれるこの家は、萱野茂（一九二六―二〇〇六）氏はじめ北海道沙流郡平取町二風谷の人たちの手によって、一九七九年の展示公開に合わせて造られたものだ。新しく造ったとはいえ、伝統的な素材と技法にこだわって復元したもので、貴重な資料である。製作にあたった方々のことを思うと、新展示ではあまり手を加えずに、しかし、チセを活かすにはどうすればよいか、議論を重ねた。

以前は、チセのとなり一九二〇年代ころの二風谷の家の周辺を再現した一〇分の一模型が展示されていた。新展示は現代のスペースを増やすために、これまでの展示資料の縮小や撤去が必要だった。悩んだ末に、この模型は展示から外すこととし、少し離れた壁際に展示されていたクマ送り儀礼の祭壇をここに移した。二風谷ではチセの東側の窓に面した場所に祭壇が設けられるので、本来の配置にしたのである。チセのなかと祭壇の前にマネキンを置き、儀式の様子を再現した。また、チセ

の前にモニターを設置し、建築時の写真や、萱野氏によるカムイノミ、萱野氏と大塚和義名誉教授との対談の動画を流すことにした。

何かを学ぶ日となるように

そうして、二週間後に公開を控えた三月三日、委託のカメラマンが完成したところから記録写真を撮っていたときのことである。照明の光を和らげるためにハロゲンランプの前に垂らしていたトレーシングペーパーが熱で発火し、それがチセの入口の茅に燃え移った。展示作業中で人手が多かったため、消火器とバケツリレーの水で消し止め、焼失した部分はさほど大きくなかった。しかし、火種が残っている危険性があるため、入口の屋根の茅はすべて撤去した。偶然にもその日、アイヌの衣類の調査のため北海道から来られていた人たちのなかに、チセの建築に携わったこともある方がいらしたため、安全かつ手際よく作業をしていただけだ。本当に心強く、感謝に堪えない。



屋根の茅を撤去する際には家財道具や儀礼具をすべて運び出し、萱野志朗氏にチセコロカムイ（家の守り神）に祈りを捧げていただき、いったん別の場所で保管し、清掃後、再展示にも立ち会っていただいて元に戻した。2016年4月

すぐに館内に緊急対策部会が作られ、対応が



現在のチセの展示。奥のロルンブヤラ（上座・神の窓）から、祭壇が見える

再生のために、公開は三方月延期となった。

萱野茂氏の子息である志朗氏らに状況を見ていただいたうえで、チセの修復について相談をした。焼失を免れた母屋にも消火剤がかかっていたので、屋根の茅はすべて外し、当面は骨組みが見える状態で公開することとし、茅（ヨシ）やシナノキ樹皮の縄を準備していただき、来年三月に全面的な葺き替えをすることになった。

今回の失火では、大切な資料を損傷させてしまい、多くの方にご心配とご迷惑をおかけしてしまっただことに心が痛む。しかし、関係者のなかに「何かを学ぶ日になるようにと、カムイがそうしたのかと思います」とことばをかけてくださる方もいた。全面的な葺き替えをするこの機会に、記録を撮りつつ、チセについてしっかりと勉強させていきたい。

アイヌと 海外の先住民

岸上 伸啓

民博 研究戦略センター

認知された日本の先住民

この五〇年あまりのあいだに先住民ということばが世界的に人口に膾炙するようになった。先住民とは、現代の国家のなかで政治経済的な主流派



カナダ極北地域のクーージュアック村で日本とアイヌ民族について説明する長谷川由希さん。2006年夏。提供・Makivik Corporation

である人びとが到来する以前からその土地に住んでいたが、現在ではその社会のなかで政治的に弱者の立場にある人びとの総称である。

一九六〇年前後に米国で盛んになった黒人による公民権運動から刺激を受けた米国先住民が権利運動を展開したことが契機となり、世界各地で先住民運動が盛んになった。国連は一九九三年を国際先住民年と宣言し、その後、積極的に先住民運動を支援し、先住民の政治的地位の向上に尽力するようになった。この時期にアイヌは日本の先住民であると国内外で明確に認知されるようになるとともに、国境を越えた先住民間の交流も盛んになった。

国際交流するアイヌ

一九九〇年代後半には二風谷のアイヌはカナダ国ブリティッシュコロンビア州アラートベイに住む先住民クワクワカクウとのあいだで青少年の相互訪問を始め、白老のアイヌはフィンランドのサーミと交流をおこなった。

こうした動きを受けて、本館も二〇〇五年一月に先住民の社会運動に関するシンポジウムを開催した。このときに、カナダ国ヌナヴィク地域のイヌイトの政治リーダー、モントリオール在住の都市イヌイトの生活向上運動の指導者、北海道で暮らすアイヌ文化の継承者、関東在住のアイヌを招聘し、当事者が中心となってイヌイトとアイヌの生活、政治的な状況、文化継承問題を検討



アイヌと世界の先住民との交流について解説するサブセクション「世界をひろげる」の展示

した。このシンポジウムで意気投合したイヌイトが翌年の夏に二名のアイヌをカナダのヌナヴィク地域とモントリオールに招待し、狩猟や共食など生活体験を含めた文化交流をおこなった。このような海外の先住民との相互交流・体験をおして、アイヌは世界各地の先住民の政治的・文化的な状況を知り、自らの現状を認識し、将来を考えるための参考にしようになった。アイヌの交流の輪は、いまやオーストラリアやニュージーランド、ロシア極東の先住民にも広がっている。現代のアイヌは海外の先住民と積極的に意見交換し、世界の先住民の一員として自らのみならず世界各地の先住民の政治・文化・経済的な状況を向上させるための活動に参加しているといっているだろう。

国立アイヌ民族 博物館の設立

佐々木 史郎

国立アイヌ民族博物館設立準備室 主幹

民族共生の象徴空間

二〇二〇（平成三二）年の開館を目指して、国立アイヌ民族博物館の設立準備が進められている。この博物館は北海道白老郡白老町に設置される



ポロト湖畔のチセ（アイヌの伝統的家屋）。このチセが建つ一般財団法人アイヌ民族博物館が有する博物館機能の一部は、国立アイヌ民族博物館に継承される予定である

「民族共生象徴空間」の中核施設のひとつであり、アイヌ民族の文化振興、文化継承、そしてアイヌ文化の調査・研究・教育・普及活動の国際的なセンターとなることが期待されている。

二〇一五年に策定されたこの博物館の基本計画ではその設立の理念を次のようにうたっている。「この博物館は、先住民であるアイヌの尊厳を尊重し、国内外にアイヌの歴史・文化等に関する正しい認識と理解を促進するとともに、新たなアイヌ文化の創造及び発展に寄与する」（文化庁ホームページより）。そして、この理念を具現化するために、アイヌの歴史・文化の正しい知識の提供と理解の促進、その知識をもつ次世代の博物館専門家の育成、その調査・研究、博物館情報ネットワークの構築の四つのミッションをかかげる。

相互交流の場として

現在、この基本計画にもとづき、建物と展示の基本設計がおこなわれている。

建物については、白老のポロト湖周辺の自然、景観をそこなわない高さ、形状、設備をもつものとし、火災、地震、津波、浸水などの被害を回避するための対策を十分にとることを基本としている。それと同時に入館者にポロト湖周辺の美しい風景を楽しんでもらうための設備も設ける。

展示については、国内外の多様な人びとに、アイヌ民族の歴史や文化を正しく理解してもらうために、それらを総合的、一体的に展示することを基



ポロト湖に沈む夕日

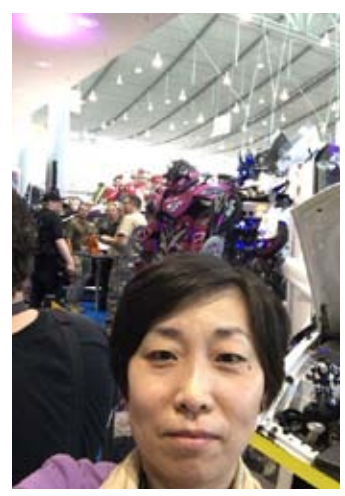
本方針としている。展示は総合展示と特別展示からなり、前者はさらに基本展示、テーマ展示、シアターにわかれる。基本展示はこの博物館の中核的な存在で、アイヌの人びとが自らの文化を紹介するという形で、「私たちの世界（信仰）」「私たちのくらし」「私たちの歴史」「私たちのしごと」「私たちの交流」「私たちのことば」という六つのテーマを設けた。ただし、基本展示といえども展示資料の入れ替えやテーマ構成の変更など不断の展示更新をおこない、繰り返し来館しても常にどこかで新しい展示が見られるようにする。

みんなの展示リニューアルから新しい博物館の設立へ
今年の三月まで民博の教員であり、アイヌ展示プロジェクトチームの一員としてそのリニューアルにかかわってきた。その基本方針のひとつに、同じ時代を生きる人びとの姿を伝える展示というものが、それに基づいて現代のアイヌの人びとの姿をより多く伝える展示となった。四月から国立アイヌ民族博物館の設立準備に従事することになったが、このリニューアルの精神は新しい博物館の展示にも生かしている。

〇〇してみました世界のフィールド

ドイツのポップカルチャー市場調査——1日目

やまなか ゆりこ
山中 由里子
民博 民族文化研究所



コミコン・ジューマニーに潜入してみました(前編)
二日目にしてすでに疲労困憊の筆者

マンガ、アニメの愛好者が集うイベント、コミコン。日本のマンガ文化がドイツのコミックファンにどう消費されているか調査してみた。

二〇一六年六月末の週末にドイツのシュトゥットガルトで開かれた「コミコン」に行ってきた。「コミコン」とはコミック・コンベンションの略で、日本の「コミケ(コミックマーケット)」に相当するような「コミックやゲームの愛好家が一堂に会するイベント」である。チケットが余ったので行かないかとたまに誘われたのだが、日本のポップカルチャーの世界展開についての科学研究費プロジェクトの分担者となっている以上、この機会を逃すわけにはいかない。シュトゥットガルトのメッセに向かった。

うごめく宇宙人、ヒーロー、プリンセス、ロボット、ゾンビ……

まず目を引いたのはコスプレイヤーたちであった。シュトゥットガルト中央駅からメッセまでの地下鉄ですでに、「オタク」っぽい人びとの密度とともにコスプレ姿の数も高まってゆく。マーベル系、DC系のアメリカンコミックのヒーローたち、「スターウォーズ」などの映画や「ゲーム・オブ・スローンズ」などの人気ドラマの登場人物になりきったおにいさん、おねえさん。もともと体格がよかったり、美人だったりするので、カッコイイ。なかには「ゼルダの伝説」などの日本発のゲームや、「ドラゴンボール」「セーラームーン」「ワンピース」などのアニメのキャラクターも結構いた。



エントランスの武器チェックポイント

メッセの建物のエントランス。ホールには、ワッフェン・チェック(武器チェック)と書いたブースがあり、休憩中のストームトルーパーが係りのおじさんと談笑している。ブースの奥の棚には巨大なハンマーや槍や銃……。戦闘もののコスプレには武器(もちろん造り物)が付き物であるが、その大きさや重量には規定があり、大きすぎて

邪魔だったり、人に危害を加えそうな武器は会場にもって入れない。つまり付帯品の造形に気合いを入れすぎると、一時没収されてしまうのである。英独二カ国語のプログラムをもらって巨大なホールにいよいよ入ると、ドイツでは都会でもこれだけの人混みは見たことがないというくらい、閉じられた空間のなかで人が蠢いている。人ではない怪物、ゾンビ、ロボットも、うじゃうじゃいる。暑いし、広いし、あまり予習もしてこなかったため、何がどこにあるのか、どう見ればよいのか、わけがわからない。撤退したい気持ちを抑え、「一眼レフカメラを構えて」「日本から取材に来ました」という面持ちで人混みのなかを進んだ。

市場の縮図

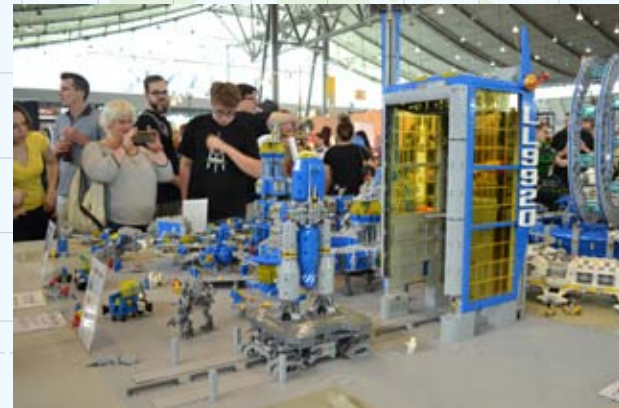
案内図を見ながらとりあえず端から端まで歩いてみると、いくつかのゾーンにわかれていることがわかってきた。衣装制作の道具や素材を展示販売している「コスプレ王国」、コミック出版社ブースがまとまった一角、映画およびゲーム産業に関連した

広報・販売をしているメディア関連の一角、そしてイラスト・コミック・マンガの作家たちが



コスプレグッズの販売

ドイツ、シュトゥットガルト



「ブリッキング」のコーナー

自らの作品を展示販売する机が並んだ一角。さらに、おもちゃのブロックで映画やドラマの場面を組立て、ジオラマ風に再現した「ブリッキング」作品の展示コーナーが会場中央に陣取っていたが、これがドイツ独自のジャンルなのか、「コミコン」の専門家に聞いてみたい。

「オタク」たちの購買欲をそそるグッズ販売のブースも多くあり、ボワット・ベントー(ボワット/Boie)はフランス語で箱)としてお弁当グッズが山積みになっていたり、日本では百均で売ってそうな和製スナックが二・三倍の値段でも飛ぶように売っていたりした。が、これらは日本人が直接出店しているのではなく、フランス人や中国人による個人経営であった。日本の出版社のブースも探したが、和製マンガの翻訳・流通はドイツの大手コミック出版社が市場を押さえているらしい。日本の会社で直接ディスプレイを出していたのは任天堂ぐらいであろうか。

フランスやアメリカのコミコンでも状況が同じなのか知らないが、映画・テレビ・玩具産業とがつり手を組んでドイツのポップカルチャー市場で存在感を示すアメリカのコミック大手と日本のマンガ産業の影の薄さは対照的であった。いくら首相がスーパーマリオの恰好(かっこう)をしても、市場開拓の絶好の機会を見逃しては、「クールジャパン戦略」も看板倒れに終わってしまうのではなからうか。(二日目につづく……)

特別展 「見世物大博覧会」
本展では、江戸から明治時代にかけて大いに流行し、現代に至るまで命脈を保ってきた見世物の世界を、絵看板、錦絵、一式飾りや生人形(じきにんぎょう)など、さまざまな資料をとおして紹介します。
会期 11月29日(火)まで
会場 特別展示館

年末年始展示イベント「とり」
2017年の干支である「とり」をテーマに、みんなく所蔵の資料や写真を展示し、世界各地の「とり」を紹介します。
会期 12月8日(木)～2017年1月24日(火)まで
会場 本館ナビひろば

みんなく公演
「アイヌ民話人形劇 ふんだりけつたりクマ神さま」
新「アイヌ」の文化「展示フォーラム」の一環として、民話を原作とした人形劇を上演します。
日時 12月3日(土)
午前の部 上演のみ
11時～12時(10時20分開場)
午後の部 上演、トークショー
14時30分～16時(13時50分開場)
会場 本館講堂(各回定員450名)
出演 阿寒アイヌ工芸協同組合
司会 齋藤玲子(本館准教授)
※要事前申込、参加無料(要展示観覧券)

みんなくセミナー
時間 13時30分～15時(13時開場)
会場 本館講堂 定員 450名(当日先着順)
参加費 無料(展示を閲覧になる方は展示観覧券が必要です)
第462回(11月19日(土))
博物館の中の古代アメリカ文明
講師 鈴木紀(本館准教授)
マヤ、アステカなどの古代アメリカ文明は博物館でどのように展示されているのでしょうか。これらも文明は消滅した過去の文明でしよつか、それとも現代にも影響を及ぼしているのでしょうか。主に北米と中南米諸国の博物館を比較しながら、古代文明展示が発するメッセージを探ります。



マヤ民族の歴史を展示するメキシコの博物館

みんなくウィークエンド・サロン
研究者(話者)

本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」調査している地域(国)の最新情報「みんなく」の展示資料について分かりやすくお話しします。

11月6日(日) 14時30分～15時 本館ナビひろば
アンケートが語るピテオテックとみんなく電子ガイド
話者 山本泰則(本館准教授)

11月13日(日) 14時30分～15時30分 本館ナビひろば
アラブ人キリスト教徒の視点からみた中東情勢
話者 菅瀬晶子(本館准教授)

11月27日(日) 14時30分～15時 特別展示館
博物館と見世物―珍獣幻獣大集合―
話者 山中由里子(本館准教授)

※申込不要、参加無料(要展示観覧券)

台湾文化光点計画 上映会・シンポジウム
「民族誌映画にみる文化への視点」
―台湾、日本、ノルウェー、エチオピアの作品より―
日時 11月12日(土)、13日(日)
10時30分～16時30分(10時開場)
会場 本館講堂(定員450名)
※申込不要、参加無料(要展示観覧券、先着順)

公開講演会
私たち人類はどこへ行くのか?
「スイカで踊る、クジラを祭る」
生き物と人 共生の風景」
生き物と人との新しい関係から人類社会の未来について考えます。
日時 11月10日(木)
18時30分～20時40分(17時30分開場)
会場 日経ホール(東京、定員600名)
講師 遠藤秀紀(東京大学総合研究博物館教授・作家)、岸上伸啓(本館教授)、池谷和信(本館教授)

主催 国立民族学博物館・日本経済新聞社
※要事前申込、参加無料、手話通訳あり
お問い合わせ先
研究協力係 06・6878・8209
お問い合わせ先
国際協力係 06・6878・8250

公開フォーラム
「世界の博物館2016」
日時 11月23日(水・祝)13時～17時
会場 本館第5セミナー室(定員70名)
※要事前申込、参加無料

お問い合わせ先
カミノミ神への祈り
日時 12月1日(木)10時30分～11時50分
会場 本館玄関前広場(雨天の場合は、特別展示館休憩所(地階)にて開催)
※見学可能

北大阪ミュージアムメッセ
日時 11月19日(土)、20日(日)

会場 本館エントランスホール及び特別展示館(休憩所(地階))
※申込不要、参加無料(当日は無料観覧日です)
主催 北大阪ミュージアムネットワーク

連続講座「みんなく×ナレッジキャピタル」
「展示キュレーションの誘惑」
―新しいみんなく展示ができるまで―
時間 19時～20時30分
会場 グランフロント大阪北館1階
ナレッジキャピタルカフェラボ

※要事前申込、参加費500円(1ドリンク付き)、定員各回50名
主催 国立民族学博物館
一般社団法人ナレッジキャピタル
11月9日(水)
新しいアフリカ展示ができるまで(仮)
講師 吉田憲司(本館教授)

11月24日(木)
新しいオセアニア展示ができるまで(仮)
講師 須藤健一(本館館長)
お申込み・お問い合わせ先
一般社団法人ナレッジキャピタル
06・6372・6530

みんなく×無印良品らほーとEXPOCITY
開業1周年記念みんなくツアー
日時 11月12日(土)、13日(日)13時～16時30分
会場 本館ナビひろば等
主催 無印良品
特別協力 国立民族学博物館
※参加方法や参加費などの詳細は無印良品のホームページでご確認ください。

カレッジシアター「地球探検紀行」
時間 13時～14時30分
会場 あべのハルカス近鉄本店(スベース9)
※事前申込(参加状況により当日受付あり)、参加費各回1000円(定員各回50名)
主催 産経新聞社、近鉄文化サロン、スベース9
特別協力 国立民族学博物館、千里文化財団

●みんなく無料シャトルバス時刻表

| 国立民族学博物館発 | | 大阪モノレール万博記念公園駅発 | |
|-----------|----------------------|-----------------|----------------------|
| 時 | 国立民族学博物館 →万博記念公園駅 | 時 | 万博記念公園駅 →国立民族学博物館 |
| 10 | 50 | 10 | 06 36 |
| 11 | 20 | 11 | 06 36 |
| 12 | 30 | 12 | 46 |
| 13 | 00 30 | 13 | 16 46 |
| 14 | 10 40 | 14 | 26 56 |
| 15 | 10 40 | 15 | 26 56 |
| 16 | 30 | 16 | |
| 17 | 00 | 17 | |

運行日 11月27日(日)までの土曜・日曜・祝日
運休日 11月3日(木・祝)、5日(土)、6日(日)

刊行物紹介
■国立民族学博物館 編
見世物大博覧会
国立民族学博物館 1,700円(税抜)
特別展「見世物大博覧会」の図録。江戸から昭和・平成まで、人びとを惹きつけてきた多種多様な見世物の世界の魅力を、約500点の絵看板や錦絵、写真資料などフルカラー図版で紹介。実行委員による解説・エッセイも収録。全212ページ。

■竹沢尚一郎 著
The Aftermath of the 2011 East Japan Earthquake and Tsunami: Living among the Rubble
Lexington Books \$90
東日本大震災で甚大な被災を受けた岩手県大槌町の人びとが、被災後にどのように行動したかを、インタビューに基づいて執筆したもの。原著である「被災後を生きる―吉里吉里・大槌・釜石奮闘記」は、2013年講談社ノンフィクション賞最終選考5作に残った。原著および本作は、日本語と英語で書かれた東日本大震災に関する人文社会系の最初のモノグラフの1つである。

国立民族学博物館友の会 電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6878-3716
http://www.senri-f.or.jp/ E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

友の会

友の会講演会 (大阪)

会場 本館第5セミナー室(定員96名)
※当日先着順、会員証提示(会員外500円)
第461回 12月3日(土)13時30分～14時40分
インドにおける出産をめぐる信仰と産後ケア
講師 松尾瑞穂(本館准教授)
近代化が進むアジアの地域と同様、今日のインドではかつて広く見られた産婆の立ち会いによる自宅出産は減りつつあります。出産は「けがれ」の觀念と深く結びついていますが、病院出産の普及とともに、出産の慣習は変化してきました。一方で、母親を取り巻く親族や地域に根付く産後ケアがあり、それはカーストや信仰とも関わっています。本講演会では、変わりゆく出産と産後ケアを通して、インド社会への理解を深めます。
●講演会終了後、講師を囲んで懇談会を実施します(40分)
第462回 2017年1月7日(土)13時30分～14時40分
アイヌ文化を楽しく学ぶ―関西での活動を例に
ゲスト 藤戸ひろ子(ミナミナの会代表)
講師 齋藤玲子(本館准教授)

東京講演会
第116回 2017年1月9日(月・祝)
13時30分～14時40分
「アイヌアート」をもっと身近に
―イラストレーションから踊りまで―
ゲスト 小笠原小夜(アイヌ文化交流センター非常勤職員、イラストレーター)
講師 齋藤玲子(本館准教授)
会場 アイヌ文化交流センター(要事前申込、会員・会員外ともに無料)

「東京」連続講座
「素顔の地球に出会う」
―人類学者たちのフィールドワーク―
会場 モンベル渋谷店5F(サロン)
時間 13時30分～15時30分
※要事前申込、会員証提示(会員外1000円)
11月12日(土)
シベリアで生命の暖かさを感じる
講師 佐々木史郎(国立アイヌ民族博物館設立準備室(主幹))

11月9日(水)
西アフリカの王国を掘る
―文化人類学から考古学へ―
講師 竹沢尚一郎(本館教授)

11月30日(水)
ドリアン王国探訪記
―マレーシア先住民の生きる世界―
講師 信田敏宏(本館教授)

お申込み・お問い合わせ先
ウエーブ産経カレッジシアター係
06・6633・9087

●無料観覧日のお知らせ
11月3日(木・祝)、11月19日(土)及び11月20日(日)は、本館展示と特別展を無料で観覧いただけます。ただし3日は自然文化園(有料区域)を通行される場合、入園料が必要です。
●みんなく無料シャトルバスのご案内
大阪モノレール「万博記念公園駅」でみんなくとの直通無料送迎バスを運行します。
運行日 11月27日(日)までの土曜・日曜・祝日
1日11往復、所要時間10分
運休日 11月3日(木・祝)
5日(土)、6日(日)
※臨時に運休することがあります。詳細は本館ホームページをご覧ください。
※各イベントについてくわしくはみんなくホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時～17時(土日祝を除く)です。

巡回展 瀬戸内国際芸術祭2016連携事業
「イメーションのカ」国立民族学博物館「コレクション」にさぐる
会期 11月27日(日)まで
主催 香川県立ミュージアム
国立民族学博物館
千里文化財団
会場 香川県立ミュージアム
休館日 月曜日(祝日の場合は翌日)

味の根っこ

モンゴルの記憶の起点となる料理 ヤギのボードク

辛嶋 博善 北東アジア地域研究国立民族学博物館拠点 拠点研究員



ヤギのボードク

よ、冷凍保存にせよ、それは肉を一度に大量消費せずに長期保存できるようにしたモンゴル遊牧民の知恵の結晶である。このヤギのボードクの場合には当然のことながら一度に二頭丸ごと使用するようになるので、大変贅沢な料理といえる。もちろんさまざまな状況により異なるが、通常モンゴル遊牧民は、家族、あるいは移動式住居ゲルの居住者で食事をする。家畜の世話の手伝いをする牧夫や競馬大会の騎手になる子どもなどの居候が同居していることもあるし、また人が家を訪ねてくればお茶や料理を提供するのが彼らのしきたりであるので、食卓を囲む人数が増えることがある。その場合でも多くて一人程度である。そしてまた、彼らは調理されたものは当日かせいぜい翌日までに消費する。電子レンジはおろか冷蔵庫もモンゴル遊牧民のあいだでは一般的ではないし、作ってから時間が経過した料理は体を壊す原因になると彼らは考えている。一家族が一回の食事とするには、ヤギのボードクは過剰な量となってしまうのである。むろん例外はあるが、ヤギのボードクが作られるのは特別な機会、特に多くの人数が集まる時ときとなる。

ヤギのボードクが作られるとき

草原のキャンプに人びとが集うのは、町に住む親類が遊牧民のキャンプを訪れたときであり、ヤギのボードクが作られるのはこうしたときである。今でこそ携帯電話や自家用車が普及し、

モンゴル遊牧民の食卓

モンゴル人、特に遊牧民の食生活に目を向けてみると、日常的に使う材料の種類はかなり少ない。小麦粉、ときどき米またはプントウーズ（韓国のタンミョンに似た乾麺）、そして肉や内臓、乳製品、塩とわずかな野菜でほとんどの料理を成立させている。日常の料理とよべるものは、茹でた肉や内臓、揚げ餃子、蒸し餃子、汁うどん、スープのない蒸しうどん、米入りスープ、モンゴル風のパエリア、プントウーズの炒め物などで、何とかヴァリエーションを確保しているものの、やはり少ないことは否めない。とはいえ、特別な機会にしか作られない料理もある。彼らが心待ちにする陰暦の正月にはヒツジの丸茹でや専用の型を使った揚げ菓子などが作られる。そしてまた、ヤギのボードクも特別な機会に作られる料理である。

軟らかく、ジューシー

ヤギのボードクとは、ヤギの皮を袋状の容器にして、なかに肉や野菜、焼いた石を入れ、蒸し焼きにしたものである。日常の食事を作るのはおもに女性の仕事であるが、この料理を作るときは大抵男性の出番である。ヤギの皮は容易に噛み切れないほど固いものの、表面を直火で炙っているため香ばしい。そしてなからじつくりと石で蒸し焼きされた肉は軟らかく、ジューシーである。彼らにいわせれば焼いた石の香ばしさや味が染みこんでおり、それが極上

遊牧民と町に住む人びとが連絡を取り合い、必要があれば駆けつけることも珍しくなくなった。しかし、ほんの十数年前までは親類が集うことは非常に大変なことであった。わたしの調査地では当時遊牧民が町に住む親類と連絡をとるためには、まず遊牧民のキャンプからウマを駆って約二〇キロメートル離れた集落に赴いて電話を掛けなければならなかった。そこではじめて親類たちにヤギのボードクを作るから集まるようにと、その日時が伝えられた。連絡を受けた親類は近くに住む別の親類にその旨を伝え、それぞれが何とか足を確保して草原に馳せ参じたのである。

こうして集まった親類たちに振る舞われるのがヤギのボードクである。このときには多くの親類が集ったため、お腹いっぱい食べられるようにと二頭のヤギでボードクを作ったのであ



ヤギのボードクを味わいながら催された宴の一コマ。宴のために立てたテントにて



ヤギの放牧。モンゴルではヒツジとともに放牧されるのが一般的である

なのだという。多くの日本人にとっては脂っこいと感じられるかもしれない。だが、肉好きなら彼らにとってはやはりそれが旨さの源なのであろう。そしてまた、流れ出した脂を含んだ汁も彼らの好物である。「余分な脂を落とす」という概念は彼らにないと思われる。

牧畜民である彼らにとってヤギは手近にある食材であるため、ヤギのボードクが特別な料理であるのは一見奇異な感じがするかもしれない。日常の食事では、肉は茹でるのが調理法として一般的である。また、干し肉にしたものや、冬であれば冷凍保存したものを切り分けて小麦粉などとともに調理することが多い。干し肉にせ

た。もちろん、その後も親類が遊牧民のキャンプを訪れることはあり、その際にヤギのボードクを振る舞うことはあったものの、一度に二頭のボードクを作ったことは後にも先にもないよう、十数年たった今でも人びとの話題に上ることがある。多くの親類が集い、男性のみならず女性もモンゴル相撲をおこなったことや、それぞれが余興で歌を歌ったりしたこと、そしてわたしが酔って横になっていたことを次々に思い出すのである。親類のつながりを強化するといったは大げさかもしれないが、ヤギのボードクが記憶をたどるひとつの起点となっていることは間違いない。

ヤギのボードク(ヤギの大きさにより30~40人分前後)

| | |
|------|-------------|
| ヤギ | 1頭 |
| 塩 | 適量 (150g程度) |
| タマネギ | 適量 (400g程度) |

- ① ヤギの皮を剥ぐ。耳の上から切り始め、皮に付いている肉はそのまま残し、骨付き肉や内臓を取り出し、皮を袋状にする。
- ② こぶし大の石を35~50個ほど熱し、骨付き肉とともに皮袋に詰める。このとき肉と石が層になるように交互に入れる。適宜塩などの調味料、好みにより刻んだタマネギなどを入れる。
- ③ 皮袋の口をウマの尻尾の毛や針金で、蒸気が出ないように固く結ぶ。
- ④ 外側を焚き火やバーナーであぶる(バーナーの場合2時間30分が目安)。適宜焦げた毛をナイフなどで削ぐ。脂が染み出してきたら完成。

「よそ者」が継承する文化遺産

—モロッコ・マラケシュのリアド

やすだ しん
安田 慎 帝京大学講師

文化遺産の保全は、地域住民にのみ託されたものなのか。観光の現場では、固定化された前提を問わず実践がおこなわれている。

中東における

旧市街と生活空間の保全

中東各地では近年、旧市街にある文化遺産としての歴史的建造物を観光に活用することが流行している。その結果、お洒落なレストランやカフェ、ホテル、ゲストハウス、ギャラリー、ブティックが建ち並び、観光客のみならず地域のひととの交流の場ともなっている。

ブームの背景には、中東の旧市街が抱える特有の事情が横たわる。世界遺産に登録されることも多い旧市街は、保全のため



放棄された歴史的建造物

のさまざまな制約が課せられる結果、改装費用が高騰し、日常生活の場になじまなくなっていた。その結果、これらの建造物が放棄されることも多く、文化遺産の登録が、保全ではな

く逆に破壊を招いてしまうというジレンマを抱えていた。

しかし、近年の観光振興による保全活動は、観光客や地域住民たちの憩いと交流の場を生み出し、旧市街にあらたな文化的活力を生み出してきた。モロッコ西部・マラケシュの旧市街(メディナ)も、そうした場所のひとつである。

モロッコ・マラケシュのリアドより

マラケシュの旧市街も御多分に漏れず、リアド(リヤード)



とよばれる伝統的家屋を改装し、手頃な値段のホテルやゲストハウスとして活かす動きが見られる。観光客からの人気を博している。筆者も他の場所ではできないモロッコのな体験を期待し、友人の研究者から聞き出し、ウェブ上のホテル予約サイトでいくつかを予約し、クレジットカードで前払いをして現地へと赴いた。いざマラケシュへと足を運び、旧市街の雑踏を抜け、狭い通りの奥にある一軒のリアドに着くと、いかにもモロッコの「伝統的な」雰囲気を感じ出す部屋や

中庭が広がっていた。特に、マラケシュやモロッコ各地で作られたと思われる伝統的な手工芸品や調度品、装飾で埋め尽くされた内装は、オーナーのセンスの良さを感じさせるものであった。さすがモロッコだと感じていると、一人の欧米人女性が筆者にあいさつし、自分がこのリアドのオーナーだと告げるのであった。その瞬間、筆者は思わず返答に窮するのだった。

翌日に次のリアドに移ると、レセプションの奥で優雅にモロッコ・ティーをすすっているのは欧米人のオーナーだとスタッフの一人が教えてくれる。中庭でお茶をいただいていると、近くに住んでいると思われる別の欧米人がやってきて、中庭で優雅にパソコンを広げながらオーナーとフランス語で会話を楽しんでいる。これはいったいどういふことなのか……。

倒錯する「モロッコ性」

近年では欧米人のあいだでも旧市街のリアドを購入し、自分の好きな装飾や調度品で揃そろえてホテルやゲストハウスを開業することがブームになっている。

その背後には、モロッコ政府による外資誘致や観光振興政策の動き、欧米諸国とモロッコとのあいだの給与水準や物価の格差といった政治的・経済的要因が見て取れる。しかしそれ以上、欧米人によって表現される「モロッコ性」とは何であるのか、という点に研究者としてはどうしても目を向けなくてはならない。

これまでの中東観光研究のなかでは、乱暴な言い方をすれば、ゲストとしての先進国観光客と、ホストとしての新興国の地域住民の非対称性がもたらす社会的インパクトが研究



右上：マラケシュ旧市街の様子 左上：リアドの外観
下：改装されたリアドの中庭

対象となってきた。この議論では、文化遺産の保全と継承は地域住民によって担われるはずである、というある種の「思い込み」が前提となって議論が展開されてきたと言える。

しかし、これらのリアドの事例は、その固定化された前提そのものに疑問符をつける。ゲストであるはずの欧米人がホストとして、モロッコという地域の文化遺産を「洗練させ」、継承していく。むしろ、地域住民が生活空間の日常の諸実践のなかで織り成し、表現してきた「モロッコ性」よりも、欧米人オーナーの演出する「モロッコ性」にこそ、観光客のみならず地域住民たちもオーセンシティティを感じ、そして消費していくように見受けられる。

文化遺産を保全するとは何であるのか。モロッコでのフィールド調査の最中、こんな疑問が頭のなかをめぐり続けていたのだ。

次なる「手芸」へ

ひろいのぶこ 染織造形作家／京都市立芸術大学教授



資料を見ながら作り方を考える授業

お金のため？アートや自己表現のため？家事のため？
「手芸」をおこなうのは何のためなのか。手を使うという人間としてのより根本的な「営み」ととらえたとき、何が見えてくるのだろうか。

技であり、手の芸である。

そこでは染織、陶磁器、木竹工や漆、和紙はもとより、各種の絵画、彫刻も横並びだ。そして、描く、塗る、彫る、縫う、織る、組む、染めるなど多様な造形手法が網羅され、木、竹、土、石、貝、革、布、糸、紙、ガラス、金属、樹脂などの手で加工できるあらゆる素材が同列である。もはや手芸領域は造形芸術を飲み込んだのだろうか。

しかし思い返すと、平面や立体を問わず、いわゆる手芸的手法を取り込んだアート作品を目にするようになってすでに久しい。そもそもアートは貪欲なのである。

教育の現場では

日々接する学生たちの幼少期における自然や素材との体験が、かつてより脆弱だと感じるのはわたしだけではないだろう。

人間の創作活動は視覚のみならず、皮膚

感覚と深い関係にあり、手指の運動能力が脳の発達に大きく関わっているという事実を、遠い未来への準備段階でもある教育の場で軽視してはならない。多様な物質と手による接触体験は、現代人には以前に増して大切なはずだ。

我々が手芸と聞いて思い出すのは、かつて家庭科の授業で刺繍や縫物の課題で苦心した遠い記憶だろうか。

兵庫県立西脇高校生活情報科が文科省からスーパー・プロフェッショナル・ハイスクールの研究指定を受けたことから、わたしはここ数年研究推進委員として高校教育の一端を垣間見るようになった。

その内容とは、西脇市の地場産業である綿織物のデザインから起こして、オリジナルの生地作り、縫製作業、ファッション

手の芸のこれから

このように手作り製品の展示会などを見渡してみると、自らの身体は使わず、他人による手仕事を求めているようだ。そこでの欲求は、何であろう。美しいもの、愛らしいもの、丹念な手業、卓越した技巧、あるいはお買い得で心地良い周辺の雑貨なのだろうか。

これまで我々は過去から長いあいだ、生活上の必要に迫られて、物を作り続けてきた。また知らず知らずのうちに自ら作ることで得られる快感や達成感、美的欲求にけん引されてきた。

また最近知ったのだが、手や指先を動かすことによって、人間は心の安らぎを得ることができるといふ。例をあげると、手縫いや糸を紡ぐなどの慣れた作業をすることで心身はリラックスして、α波という脳波が出ることが確認されているという。

人間だけがものを作り出すことができ、そのことに依って更なる能力を磨き、ここまで生き延びてきた。単にパネルをタッチするだけではなく、過去に遡って手と手仕事への敬意を思い起こしたい。
そして、次なるモノづくりもまた手から始めたいと思う。

ショーで発表し、それをブランド化して海外へ発信しようという壮大な試みである。この生活情報科は一九九七年に家政科を改称したのだが、その内容もまた時代につれて変化しているのだ。指定されたプロジェクトは、従来の家族のために手作りする事からは距離をおき、さまざまな状態で物を生産し、積極的に社会にかかわっていかうとする姿勢が顕著である。若い世代のそうした経験を文科省は奨励しており、いわば広義のデザイン活動だとも言える。



ファッションショーに向けて高校生たちが縫製をする

人は手仕事に惹かれる

近年、手芸のイベントが大きな集客力を持ち、個人製作や少量生産の手仕事価値を増している。またインターネット上で



タリン市内の店内。民族衣装の展示は見応えがある

土地に名を刻む

What's in a name?

うちだ よしや
内田 吉哉 民博 機関研究員

「名前」をテーマとするこの企画、これまで「人の名前」がしばしば話題に上がっているのだが、人の名前には地名とかかわりをもつものが少なからず見られる。例えば日本の場合、加藤という名字は、藤原氏の子孫が加賀国（現在の石川県南部）の国司に任ぜられたことから「加賀の藤原」を略して称したものとされる。逆に、人名が地名の由来となることもある。東京駅八重洲口の「八重洲」が、江戸時代初期に幕府に仕えたオランダ人、ヤン・ヨーステンの名前に由来することはよく知られているし、大阪の歓楽街「道頓堀」は、堀川を開削した安井道頓の名前にちなんで命名されたものである。

こうした人名が地名の由来となるケースは、日本の場合だと一七世紀以降に開発された地域に多い。国立民族学博物館の所在地である大阪の場合でいえば、豊臣秀吉が一六世紀末に大坂城を築城し、同時にその城下を造成して以降の話となる。

大阪は古い歴史をもつ土地だが、現在の大都市・大阪の直接のルーツとなったのは、秀吉が作った城下町と、それを引き継いだ江戸時代以降の町並みである。現在でも大阪市の中心部、かつて「船場」とよばれた旧市街地は、南北に走る道路を「筋」、東西に走る道路を「通」としてマス目状に区画されているが、これは一六世紀末から一七世紀にかけて作られた当時の町割りをそのまま受け継いだものである。

この船場地域の大部分は、低湿地を埋め立てて造

成していった土地で、それまで何もなかったところに突如として大都市が出現したのだから、地名もあらたに創出しなければならなかった。そこで地名をつけるにあたり、命名のひとつのパターンとして、開発にかかわった人物や、その場所に屋敷があった大名・武将などの名前に由来する方法がとられ、今も大阪に残されているのである。開発者の名前を冠した例としては、先述の安井道頓にちなむ「道頓堀」の他に、長堀川（昭和四六年に埋立）の開削に携わった美濃屋心齋の名前に由来する「心齋橋」、中之島の開発に携わった豪商・淀屋の名前に由来する「淀屋橋」などがある。また大名・武将の屋敷地に由来する例としては、戦国大名の筒井順慶の屋敷があったとされる「順慶町」などがある。

他に、大名・武将の名前に由来する地名として、この記事が掲載されるころにはNHK大河ドラマの「真田丸」が大詰めに差しかかっていることと思うが、おそらくドラマのクライマックスとなるであろう大坂冬の陣・夏の陣にちなむ例もある。そのもともと有名なものが、大阪市天王寺区の「真田山町」であろう。ここは大坂冬の陣で真田信繁（幸村）が奮戦した出城の「真田丸」のあった場所とされる。厳密には昭和四〇年に制定された町名なのだが、大阪の人びとに真田幸村の名がいかにか強く刻みつけられているかを示すものといえよう。人は死んでも地名は残る。「歴史に名を残す」とはまさにこのことか。

編集後記

6月に中央・北アジアとアイヌの文化の展示場が生まれ変わり、8年間続いたみんなぱくの本館展示「新構築」がようやく一段落ついた。本号がリニューアル展示特集号の最後になると思うと感慨深いものがある。本特集に齋藤さんが書いておられるように、オープン予定日の直前にアイヌ家屋「チセ」の屋根の一部が燃えてしまうという状況に見舞われながらも、多くのスタッフの迅速な対応と、偶然居合わせたアイヌの方々の協力により、被害は最小限にとどめられた。その後の復旧作業は、みんなぱくの現役スタッフにとって貴重な学びの場となっているようである。

新構築の目標のひとつがいわゆる「フォーラムとしての展示」、つまり展示される文化に属する人びととの「双方向的・多方向的な交流の場」としての展示であった。展示の制作現場にはさまざまな現実的な制約もあるので、基本構想上の「フォーラム」の理想がなかなか叶わない場合もあるが、「アイヌの文化」展示はみんなぱくのなかでも、「展示をつくる側の人びと」と「展示される側の人びと」がもっとも密に協力しあってできた展示場であろう。

今年のカムイノミも楽しみである。(山中由里子)

●表紙：「みんなぱく オッタカムイノミ(みんなぱくでのカムイノミ)」の様子。2015年協力・阿寒アイヌ協会

次号の予告

特集

人類学における映像

月刊みんなぱく 2016年11月号

第40巻第11号通巻第470号 2016年11月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
 〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
 電話 06-6876-2151

発行人 池谷和信
 編集委員 山中由里子(編集長) 河合洋尚 菅瀬晶子
 丹羽典生 南真木人 吉岡乾

デザイン 宮谷一孝 長岡綾子
 制作・協力 一般財団法人千里文化財団
 印刷 能登印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係に
 お願いします。
 *本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「万博記念公園駅(エキスポシティ前)」 「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
- 乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんなぱくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

みんなぱくフェイスブック

<http://www.facebook.com/MINPAKU.official/>

みんなぱくツイッター

<http://twitter.com/MINPAKUofficial>



国立民族学博物館
 National Museum of Ethnology

みんなのほくぶつかん みんなぱく

MINPAKU

今年も屋外でおごそかに

標本資料の安全と伝承を祈願する「カムイノミ」

12月1日（木）、みんなぱく本館玄関前広場にて、カムイノミがおこなわれます。

カムイノミとは、アイヌの伝統的な儀礼で、アイヌ・北方先住民文化研究が専門の齋藤玲子准教授によると、カムイ（神）に安寧や感謝などの祈りを捧げるもので、チセ（伝統的家屋）や船の新築、鮭の初漁のときなど、多様な場面でおこなわれるそうです。また、個人で簡素におこなうこともあり、たとえば山に入るとき、木の根元に酒やたばこを供え、恵みをいただくことを請うような場合です。



カムイに祈りを捧げる 撮影・2015年

みんなぱくでのカムイノミは、本館所蔵のアイヌの標本資料の安全な保管、後世への伝承を目的に執りおこなわれます。かつては本館「アイヌの文化」展示場のチセ内で、故・萱野茂さん（萱野茂二風谷アイヌ資料館前館長）が祭司となり、館内の関係者のみで実施されてきましたが、2007年以降は、北海道アイヌ協会の協力のもと、屋外に祭壇を設けて公開されるようになりました。今年は、昨年に引き続いて阿寒アイヌ協会の方々にお越しいただきます。

儀式では漆器やござなど、本館所蔵の標本資料が多数使用されます。そして、カムイへの捧げ物であり、祈りや供物をカムイに届けてくれるイナウ（木幣）は、毎年新しいものが製作され、カムイノミ終了後、資料として保管されます。また、人が多く集まる儀式には、踊りはつきものです。古式舞踊もあわせて披露されます。

おごそかな雰囲気にもまれる「カムイノミ」。どなたでも見学可能ですので、一度ご覧になってはいかがでしょうか。また、12月3日（土）からは新展示に関するみんなぱくフォーラムが始まります。随時イベントが開催されますので、新しくなったアイヌの文化展示とともにお楽しみください。



古式舞踊「フッタレチュイ」 撮影・2015年

ミンパク オッタ カムイノミ (みんなぱくでのカムイノミ)

日時：12月1日（木）10時30分～11時50分

場所：玄関前広場（雨天の場合は特別展示館地下）

みんなぱくをもっと楽しみたい人のために———会員制度のご案内

詳細については、「国立民族学博物館友の会（一般財団法人千里文化財団）」までお問い合わせください。

電話06-6877-8893（平日9:00～17:00）

国立民族学博物館友の会

本館展示の無料入館や特別展示の観覧料割引にくわえ、『月刊みんなぱく』や会員機関誌『季刊民族学』などの定期刊行物や、毎月の友の会講演会、セミナーなどを通して多様な文化の情報を提供しています。

みんなぱくフリーパス

1年間、本館展示へ何度でも無料で入館いただけます（特別展示は観覧料割引）。他にも、みんなぱくを楽しむための特典がいっぱいです。

国立民族学博物館

キャンパスメンバーズ

みんなぱくと大学等教育機関との連携を図り、文化人類学、民族学にふれる学びの場を提供することを目的とした会員制度です。